

ーベトナム戦争博物館ー

カンボジアからベトナムへの国境越えは、スムーズに行われた。タイ、カンボジアに続く三カ国目に到着した。ここでの目的は、ベトナム戦争博物館に行くことである。

ホーチミン市内にバスで降りたとき、その交通量の多さとにかく驚いた。バイクの海。道路を渡るのは至難の業で、車とバイクの間をすり抜けて歩く。中国で慣れていると思っていたのは大間違いで、中国とは比べ物にならないほどのバイクの数であった。

この交通事情に圧倒された私たちは、外へ出る気すらなくしてまった。一歩間違えば、命の危険がある。しかし、学んだのは、現地の人に付いて道路を渡れば、うまく横断することができるということである。

人だけでなく、車の後ろについて道路を渡ることもやってみた。車の後ろにくっついて走ること、とりあえずは前後左右から来るバイクからは身を守る事ができた。しかしむろんのこと、スピードと反射神経のいる行動ではある。

生まれて初めて食べたベトナム料理の味も忘れることができない。材料を切っただけの、これから調理する食材が並べられ、そのめん塊のようなものと一緒に、酢のようなものを付けて食べる。



最初は食べ方すら分からずにキョロキョロしていると、両サイドの親切なベトナム人の方々がどのようにして食べるのか教えてくれた。現地の人と一緒に笑い合いながら、こんなに楽しく食事をしたのは久しぶりだった。

ベトナム戦争博物館

一日目に、ホーチミン市内を観光し、半日の時間を使ってベトナム戦争博物館を見学した。

ベトナム戦争で使われた枯葉剤によって、ベトナム市民のみならず、アメリカ軍兵士にも大きな後遺症を残した。

その後遺症のせいで戦争から帰国したアメリカ兵の子供の中には、先天的に右手がなかった。ベトナム市民から生まれた子供は何代にも渡ってその後遺症に苦しめられた。

そして、無脳症の赤ん坊の写真を見たとき、私は胸が張り裂けそうな思いになった。高校生のころ、学校の図書館で見たイラク戦争の写真集、そのなかで見つけた無脳症の赤ちゃんを思い出さずにはいらなかった。



「この子が一体どんな罪を犯したというだろう。」「なぜ戦争はこんなにも残酷に命を切り刻み、また

ずたにして、奪うのだろう」。。。その時から、戦争に対する怒りと憎しみ、平和に対する危惧を抱いたことを今でも鮮明に覚えている。

カンボジアの《キリング・フィールド》から《ベトナム戦争記念館》までの時間は、辛く苦しい見学だった。しかしこの貴重な時間のおかげでわたしは、しかと戦争の恐ろしさや残酷さをこの目で見た。

そして、これから平和学をとおして、しっかりと戦争と向き合わなければならぬと心に誓った。

新しい寝床と新しい出会い

私たちは、より良い「ホステル」を目指してホーチミンの繁華街を歩いていた。バックパッカーにとって、寝床はとても重要で、安さ、快適さ、すべて条件の良いところを探すことはとても大事な仕事である。

また、これまで半月の間、旅をしてきて、様々なホステルを経験し、要求も少し高くなってきたように思う。

明日泊まるホステルがなかなか見つからないなかで当てもなく歩いていると、三人の欧米人がホテルらしきところに入っていた。

おばさんが門番をしているところに、私たちが吸い込まれるように入っていた。わたしは、「ここ泊まるのよ」と言いきまされた。「と聞いた。

すると、一あとで知っただけどーおばさんの孫のカイ君が出てきた。英語の話せる彼は聞くところによると、現在、ニューシーランドのオークランド大学に留学しており、冬休みのためベトナムに帰国して、祖母の経営するホテルを手伝っているのだという。

私たちが日本から来たことを知ると、彼はとても親切に話しかけてくれた。

部屋に案内され、気にいった私たちは明日からこのホテルに泊まることに決めた

キッチンをついた大きな部屋に、一泊2000円で泊まることができる。二人で割るとひとりでたったの1000円である。

フロントのソファに座りながら、私たち三人はお互いに自己紹介をして会話を楽しんだ。

ベトナムに来たものの、この国の事情や物価について、全く知識のなかった私たちは、このカイ君のお陰で随分たくさんのお話を教えてもらった。

私たちがホーチミンに3日間滞在する予定だと聞いて、「それはもったいないよ。ホーチミンは一日で観光できぬよ。」と云う、



ツアーコンダクターを紹介してくれた。

ひとり30ドル程度で、一泊二日の観光ツアーである。何も予定の決まっていなかった私たちは、なんのためらいもなく申し込んだ。それが日本人は三人だけという欧米人ツアーであることも知らず。。。

インターナショナル・ツアー

翌日、フランスパンの朝ごはんを食べながら、私たちは集合場所についた。

バスに乗り込むとすぐに、自分たちが完全に少数派であることに気づいた。

周りはすべて、ヨーロッパもしくは北アメリカから来た旅行者。アジア人は私たちふたりと、日本人の退職後に旅行に来ている方三人だけだった。

私たちは空いていたバスの一番前の席に座った。これから始まる一泊二日のツアーにワクワクしていた。

何より、これまですべて自分たちで計画し、自分たちで公共機関を利用して移動し、食事から宿まですべて手配していた私たちにとって、ツアーほど楽なものはない。

バスも食事も宿もなにも心配する必要がないからだ。

ガイドのすぎちゃんはベトナム人で、英語が達者でユーモアあふれる人だった。

ギター片手に歌ったり、どこに着いてもその場所の説明をペラペラと始めた。ものすごいノリの良さに、私たちは随っていくのには必死だった。

このツアーで出会ったひと達のが今はとても懐かしい。



カナダ人の ENZ はトロント大学歴史学部を卒業後、パートナーと企業し、現在は8ヶ月間、東南アジアで転々と働きながら旅行している。

スペイン人のカトリーナは小学校の先生になるのが夢で、現在大学で修士課程を履修しながら学校で働いている。

スロバキア人のケイティはギリシャで働き、そこで現在のボーイフレンドであるカナダ人との出会った。

ポルトガル人のアリーシャはなんと復旦大学の横の同济大学で前学期中国語を学んでいたという。世界は広いようで、狭いものだ。

ツアーに参加していた人たちはみんなフレンドリーで、いつものまにか団体意識も生まれて、写真を取り合ったり、船に乗る時に手を取り合ったりと助け合った。



肌の色、母国語、年齢なんて関係なかった。ホテルについてからも自由行動の時間には同じ階に住む六

人みんなで食事に行った。
バックグラウンドも、将来の目標も違うみんなだったが一緒にベトナムの町を歩き、一緒に食事をして、一緒に笑いあった。

Facebookを交換して、私たちはこのツアーを後にした。
次の駅は、物語のあふれるインドネシアである。

一時間だけのシンガポール

ベトナムからインドネシアへ飛ぶために、乗り継ぎで一時間だけシンガポールにいた。シンガポールについては、台湾に飛ぶ際に一晩泊まっているため、そこで詳しく触れたい。

実はベトナムの最後の晩、最後の晩餐をしていると、一通のメールが入っていることに気づいた。それは、ホーチミンからインドネシア・ジャカルタ行き便のキャンセルの通知だった。

「大変申し訳ございませんが、」で始まる文章をすべて読み終わる前に、私たちは「まずい。。。。」と思った。チェックインの時間まで、9時間を切っていた。

親友はすぐに日本のジェットスターに国際電話をかけたが、日本時間で夜の時をの分過ぎており、繋がらなかった。そのあと中国語のアナウンスが流れたときに、彼女はハッと私の顔を見た。私がキョトンとしていると、賢い彼女は私にこう言った。

「ちよろげ、中国なら時差が一時間あるから、まだ問い合わせができるよ。」「ちよろげ」というのは、私の小学校時代のあだ名である。いまではこう呟んでくれる友達も少なくなっていました。

私たちは今度は中国のジェットスターに国際電話をかけた。通じた。長らく話していなかった中国語が、ここで役に立つとは思ってもしなかった。
私たちは、キャンセルされた便の一本前の7時10分発シンガポール経由ジャカルタ行き便に変更した。

あの時対応してくれた中国人スタッフの優しさや根気強さに大変感謝している。こうして私たちは無事に、翌日ジャカルタへと飛び立つことになる。

